第6室（書跡）
「－法隆寺伝来の法華経－」

N-12　法華経（ほけきょう）

　黄麻紙に薄墨の界線をほどこした料紙に『法華経』８巻を、通例の一行17文字詰めに書写したもの。やや肉太で、力強い筆運びで書写され、全巻一筆である。奈良時代の整然として端正な写経に比べるとやや柔らかみを帯びており、書写の時期が平安時代にかかっている可能性もある。

第6室　染織－法隆寺と正倉院の錦―

今回は法隆寺に伝来した染織作品とともに正倉院伝来の染織品を紹介し、飛鳥時代から奈良時代にかけての染織技法や文様の変化、また法隆寺と正倉院における錦の違いを概観したいと思います。

＊法隆寺伝来の錦

N-41-1　花鳥蝶文錦褥（かちょうちょうもんきんじょく）

錦は二色の緯糸（よこいと）を用いた緯錦で、二種類の草花文の間に鳥と蝶を配しています。

N-45-1　茶地唐花文錦裂（ちゃじからはなもんきんぎれ）

複数の色糸を組み合わせた緯錦。中国唐時代の影響を受け、唐花文を表わしています。

N-46-1　茶地獅噛鳳凰文錦裂（ちゃじしがみほうおうもんきんぎれ）

経糸（たていと）を染め分けて文様を織り出した経錦。緯錦よりも古い技法の織物です。

N-46-4　黄地唐花文綿裂（きじからはなもんきんぎれ）

大型の唐花文を織り出した緯錦。唐花文は奈良時代の仏像装飾にもよく見られる文様です。

N-46-5-2　濃茶地朽木形文広東裂（こいちゃじくちきがたもんかんとんぎれ）

広東裂とは、あらかじめ経糸を文様に応じて染め分けてから平織に織った絣織です。

N-46-3-3　赤地山菱文錦裂（あかじやまびしもんきんぎれ）

緯糸を任意に浮かせた浮文錦。菱文や山道文などの幾何学文を連続して表しています。

N-305　赤茶地亀甲繋花菱文錦裂（あかじきっこうつなぎはなびしもんきんぎれ）

亀甲繋ぎの中に花文を収めた経錦。同様の錦は正倉院宝物の中にも見られます。

N-306　緑地六弁花鳥文錦裂（みどりじろくべんかちょうもんきんぎれ）

これもまた正倉院に同様の作品が残されており、法隆寺との同時代性を示しています。

（裏面につづく）

＊正倉院の錦

I-337-156　青緑地六弁花鳥文錦（あおみどりじろくべんかちょうもんきん ）

青緑地に六弁花文を互の目に配し、地文として鳥襷風に鳥と植物文を表わしています。

I-337-160　幡足垂端飾残欠（ばんそくすいたんかざりざんけつ）

I-337-161　緑地花唐草文綾幡足垂端飾（みどりじはなからくさもんあやばんそくすいたんかざり）

聖武天皇の一周忌斎会（757 年）に用いられた灌頂幡の幡足下方に飾られた垂端飾です。

I-337-172　赤地唐花文錦（あかじからはなもんにしき）

正倉院所蔵の類裂から、もとは背子（はいし：袖のない上着）であったことが分かります。

I-337-174 紫地花鳥連珠七宝繋文錦天蓋垂飾残欠

（むらさきじかちょうれんじゅしっぽうつなぎもんきんてんがいすいしょくざんけつ）

天蓋の垂れ飾り。錦の文様は連珠で縁取った七宝繋のなかに花鳥を表わしたもの。一方の綾には複雑にツルを巻いた大柄の葡萄唐草文が表わされています。

I-337-180　淡紅地花鳥文錦幡足垂端飾（うすべにじかちょうもんにしきばんそくすいたんかざり）

I-337-181　黄緑地鹿雲文錦幡足垂端飾（きみどりじしかうんもんにしきばんそくすいたんかざり）

I-337-194　長斑花文錦幡足垂端飾（ちょうはんかもんにしきばんそくすいたんかざり）

I-337-195　黄緑地唐花文錦幡足垂端飾（きみどりじからはなもんにしきばんそくすいたんかざり）

聖武天皇の一周忌斎会で用いられた幡の飾り。さまざまな錦が見られます。

I-337-231　紫地花鳥連珠七宝繋文錦天蓋垂飾（むらさきじかちょうれんじゅしっぽうつなぎもんにしきてんがいすいしょく）

I-337-232　白茶地唐花文錦天蓋垂飾（しろちゃじからはなもんにしきてんがいすいしょく）

天蓋の垂れ飾り。I-337-231 における七宝繋文の中には鳥が表わされており、平安時代以降、貴族の装束に用いられた鳥襷紋の古い形を見ることができます。

I-337-225 霰地花文錦（あられじかもんにしき）

仏教儀礼において用いられる「幡」（ばん）という旗の上部にあたる残欠です。黄緑の地に赤と黄で霰地（いわゆる市松文様）を表わし、幾何学的な唐花文を要所に収めています。